

芽 接 ぎ の 詩 集 (4)

11

R. L. STEVENSON

&

BASHO

富 田 義 介

- ① Under the wide and starry sky,
Dig the grave and let me lie,
Glad did I live and gladly die,

And I laid me down with a will.

とおしろ
天の河遠白くして夜ふかし、
いざ穴掘りてわれを埋めよ、
魂きはる命つば審らに生きたれば、
悦びて屍かばねをここに横たへき。

- ② This be the verse you grave for me;
Here he lies where he longed to be:
Home is the sailor, home from sea,

And the hunter home from the hill.

「船人ぞいまや海より帰りきて、
獵人ぞすでに山より戻りきて、
あくがれの故郷にその骨を埋む」
これの詩彫りて墓に置くべし。

— Requiem by R. L. S.

- ③ R. L. S. = Robert Louis Stevenson (1850—1894) は真に愛唱するべき多くの詩を書いた。しかしこの Requiem 辞世の詩ほどに私の心を打ったものはザラにはない。それは何故であろうか？ 私がこの詩を読むとまっさきに連想するのは、松

尾芭蕉(1644—1694)の銀河の序という名文のことである。時は1884年の五月＝明治17年の五月、R. L. S. は旅疲れ+書き疲れ+その年に入って正月に第一回目の咯血五月に入って第二回目の咯血などで重態に陥っていた。処は南仏 Riviera の海岸。彼は Hyères 又は Hyères という小さな港町の後ろの丘の上にある ch^とâlet le Solitude (閑居庵) という貸別荘にいた。ある晩のこと窓を開いて地中海の荒波の上を、これも矢張 Hyères という名の沖の島々へかけて遠白く^{とおしろ}横たわっている天の河の荘厳の前に坐った時、ナイト・ウェアの袖に思わず旅愁の涙を落した——のでは無かるうか。俺は腹の医^いえるような生き方に徹底して生きてきた、もはや思いおくべき事はさららない、このまま此処で死にたいと考えそして母なる大地の ‘all-wombing tomb’ (James Joyce) ^との中に死かばねを横たえた時彼は彼の自由＝彼のイデア＝彼の対自 Pour-soi に随って死をえらんだのである。

脚註 ① 「河遠白し」という用例が万(3)324, (7)4011の2箇所にだけある。

② 紀要 本号に所載の吉津助教の論文 Ulysses = 関スルー考察を参照下さい。

④ そして4年前彼がアメリカのサンフランシスコの客寓にいて、貧乏と過労と病氣と闘って死にそうになった時、自分の墓碑銘として制作した詩片(上掲②の原文の最後の3行)を心のポケットから取りだして、その上に5行の詩句を加筆して現在のこの ‘Requiem’ を完成した。

⑤ 元禄二年三月、この時も、松尾芭蕉は道路ニ死ナン是天ノ命ナリと覚悟を極めて奥ノ細道の旅に上った。そして同年旧曆六月十六日乃至十七日には酒田の港を後に踵を廻らして北の方象瀧に到り、舟に乗ってこの地の風光を賞で、再び舟にのって同月十八日＝陽曆八月三日には象瀧を出て越後路への旅にさしかかった。鼠ノ関ヲコユレバ越後ノ地ニ歩行ヲ改メテ越中ノ国市振ノ関ニ至ル。此ノ間九日、暑湿ノ勞ニ神ヲナヤマシ、病オコリテ事ヲシルサズ。

文月ヤ六日モ常ノ夜ニハ似ズ

荒海ヤ佐渡ニヨコタフ天ノ河

との記載が奥ノ細道にあり、風俗文選の銀河ノ序には、北陸道ニ行脚シテ、越後ノ国出雲崎トイフ所ニ泊ル。カノ佐渡ガ島ハ海ノ面十八里、滄波ヲ隔テテ東西三十五里ニヨコヨリフシタリ。……昔ヨリ此ノ島ハコガネ多ク出デテ……限リナキメデタキ島ニテ待ルヲ、大罪朝敵ノタグヒ遠流セララルルニヨリテ、唯オソロシキ名ノミ聞エア

ルモ、本意ナキ事ニオモヒテ、窓押シ開キテ暫時ノ旅愁ヲイタハラントスルホド、日既ニ海ニ沈ンデ月ホノグラク、銀河半天ニカカリテ星キラキヲ冴エタルニ、沖ノ方ヨリ波ノ音シバシバ運ビテ、魂ケヅルガゴトク腸チギレテ、ソゾロニ悲シビ来レバ、草ノ枕モ定マラズ、墨ノ袂ナニユエトハナクテ、絞ルバカリニナン侍ベル。とある。何んと地中海岸 Hyères の瀬戸に臨む港の町の châlet の窓の戸を押し開けた労咳持ちの R. L. S. の心境と、九日の間持病の疝気と痔核とのために悩まされ、ほうぼうの体で出雲崎にたどり着いて旅宿の窓の戸を開けた時の芭蕉の心境と、酷似していることよ。

⑥ 母親の子宮の中で、一本の臍の緒によって母胎につながりながら、約そ九箇月の胎内生活をする人間の子らは、母の胎内での機体感覚をとおして生きることの根源的な意味を、アイデアを、絶対者から前意識プレコンシャスの中に授かるのである。われらは、かくして、自分に可能な方法によってその意味を開発 (develop) することに生き甲斐を感じるようになるのであるから、我等はわれらの胎内生活の中に臍の緒をとおして授かったアイデアに照合して始めて生きる事の根源的な意味を知覚するのである。

⑦ だから海や湖 (meer, mere) のイメージと母親 (mère) のそれとが、われらのアンコンシャス無意識の中で連想されて重なり合っていることは、漢字の海に母の字が含まれ、漢字の羊=羊水=子宮内の羊水であるのを見たら両者の関係はバカにでも解ることであろう。母の子宮の羊水の中に盲目的状態で9箇月をくらす胎児にとってはその羊水が boundless waters (無限の水の広がり) として受けとめられるだろうと云うことをご想像下さい。だから人間の子らは連想をとおして羊水や母親のイメージの上に、受洗の時の水のイメージ、或は教会の入口にある聖母マリアの水盤のイメージ、或は生涯の一転機を画する心境一転の際にふった雨・雨・雨のイメージ、或は街の小公園でみた噴水の側のベンチに腰かけていた女のイメージ、或は大霧の朝駅で別れた女のイメージ、或は愛する男と最後のキッスをして別れた河端の散歩道路のイメージ、或は渭城にふる朝の雨が輕塵ほこりを潤おした時に別れた友だちのイメージ、或はわれらの祖先が海洋を渡る時礎を枕にして歌った追分け調の唄のイメージ、或は故郷にあった小さな池 (a mere or pond) のイメージなどが渾然一体となってアイデアのコンプレックス=心の故郷を形成するのであり、やがては、それが愛郷心や隣人愛や反功利主義の源泉となって liberté (自由) や、égalité (平等) や、fraternité (博愛) の精神を人々の間に浸潤させて行くものであり、コミックなムードやユーモラスなムードが

極めて自然に人々の心を潤おす様になり、それと同時に人の世の到る処に発生する悲劇に対しても深い同情と理解を持つようになり、平和を愛好して戦争に反対する気持に人々が得てしてなり易く、トルストイの作品やドストエフスキーの作品がたまらなく好きになるであろうし、＜一超直入菩提地＞という禅門のモットウや芭蕉の＜古池や蛙飛び込む水の音＞という俳句や R. S. L. の “Windy Nights” という短詩がたまらなく好きになるであろう。

⑧ W. Allingham (R. L. S. の親友、イマジスト) の次の詩^①をごらん下さい。

Four ducks on the pond,
A grass-bank beyond,
A blue sky of spring,
White clouds on the wing;
What a little thing
To remember for years—
To remember with tears.

池ありき、
四つの鴨これに浮ぶ、
草萌えて池を囲み
空蒼くして雲白し、
幼き日故郷に見しこの景色、
ああ歳を経て忘れず、
涙流れて忘れず。

脚注 ① この詩については拙稿 芽接ギノ詩(1) にくわしく説明致しましたから、ごらん下さい。この詩の題は ‘A Memory’ (おもひで) となっているが、思ひ出とは心の故郷＝前意識的なアイデアの世界の思い出ということである。

⑨ 自己を作ることに依って人間の条件を改造するという対自の仕事＝アイデアの仕事＝後生の一大事と何の関係もない、無意な、語らない事のために心を煩わすことのナンセンスを人々に教えるものがユーモアの文学であり、禅門の人々のいう^〇慰戯の公案である。前者の実例が下掲 (a) の Chaucer の詩であり、後者の実例が下掲 (b) (c)

の香^〇巖^〇上^〇樹^〇及び千^〇尺^〇井^〇中^〇という有名な公案である。

(a)

TO MY EMPTY PURSE

To you, my purse, and to none other wight,
Complain I, for ye by my lady dear;
I am sorry now that ye be light,
For, certes, ye now make me heavy cheer;
Me were as lief be laid upon a bier,
For which unto your mercy thus I cry,
Be heavy again, or elle's must I die.

から
空 の 財 布 よ

ほかの者には誰にも言わん
あんた
貴方だけに言うから、聴いて遣あさい
つか
どうして、そんなに、軽うなりんさったか？
わしは難儀で難儀で仕方がない
青菜に塩とは、ほんにほんにわしがこと、
どうぞ、このわしに同情してノオ、
重とうなって遣あさい、ならんと、死なねばならん此のわしじゃ。

(b)

きよう
香 巖 上 樹

香巖和尚云く、「人の樹に上るが如し。口樹枝を啣み、手枝を攀じず、脚樹を踏ま
ず。樹下に人ありて、西来意を問わんに、対えずんば即ち他の所聞に違く。もし対
せんとはなに
こた
えば又た喪身失命せん。正恁麼の時、作恁麼か対えん。」(無門関第5則)

(c)

千 尺 井 中

性空禪師に僧問う、「如何なるか是れ西来意(禪の目的)?」と。師云く「もし人の
千尺の井中に在らんに、寸繩を仮らずして、この人を出し得ば、即ち汝に西来意を答

えん」と。僧云く、「近日湖南の鴨和尚出世して亦人の為に東語西話す」と。師乃ち
なまくさぼろず 沙弥寂子と喚びていう「ばかやろその死 漢を曳き出してきて看よ」と。(葛藤集第65則)

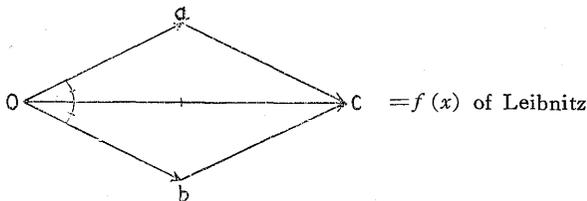
〔以下略〕

でもある。われらはこんぐ欣求イデアによる現状超越の姿勢が、空中＝純粹意識の中において＝絶対の無の中において＝前意識の中において、現状を打開して解脱を得る姿勢と均しくなること、更には宇宙の生命の原理＝イデアを人格化したものが芭蕉のいう造化であり、R. L. S. のいう神であることを忘れてはなるまい。甚だしい病苦と貧困とも拘わらず能く苦しい現状から解脱することを得て、或は<荒海や佐渡によこたふ天の河>と叫び、或は<Glad did I live and gladly die>と詠じて、欣求イデア的超絶主義に依る解脱の喜びを告白したのはソロウ、エマソン、ホイットマン、エリオットらのそれと共に東西比較文学上の壯観だと言わざるを得ない。

⑩ はじめ 太初にロゴス (logos) ありきと云う、そのロゴスとは現実の事象の上に宇宙的生命の原理であるイデアを直観する人間的な能力のことである。人間のもちうるこの能力は、われらが母親の胎内にいる間にわれらの前意識の中に形成されるものだとするの私たちの立ち場であり、臍の緒を通じての胎児の胎内生活期を次の3期に分けるというのが私たちの主張である。

- | | | |
|-------|---|----------------------|
| 胎内生活期 | { | (1) 前意識 上 期 (安養期) |
| | | (2) 前意識 中 期 (安養・運動期) |
| | | (3) 前意識 下 期 (自由運動期) |

人間の子らが臍の緒を切って胎外に生み落されてからの生活行動の路線はすべて次のような the *ideo-topological dialectics* (因縁弁証法) によって微積分的に *figure out* (算出) されている。



Ⅱ 強権をもって場所又は即自^{トボロジツク}の論理という有限とアイデアという無限とをゼロの中に force to exist (実存せしめる) ものは何であろうか? 私は、天文神話にでてくる天平=天秤 = the balance-in-the-heavens の故知に倣って by one's own balance as set in the core of his very heart の文字を付加したい。この頃 YEATS: THE MAN AND THE MASKS by Richard Ellmann (Dutton & co.) という本を読んでいると p.126 に次のような文章があった。

“... the candidate^① is not encouraged to seek good or to be good, but rather to pursue ‘the joyful imperishable thought, the last coming to himself, the truth that is his, not another’s. This was Yeats’s own effort to discover his true individuality, but he does not suggest how the discovery can be made, for indeed he does not know.”

ホイットマンの「草の葉」を読むと掃いて捨てる程有る思想ではあるが、近頃快心の文字だと想ったので茲に付記する。

脚注 ① 民俗宗教的の秘密結社への入会希望者のこと。

② 下関市郊外にクルソン (Xson) 山という景教 (ネストリウス派キリスト教) のお寺でもあったろうかと思われる山宮がある。そこのご託宣に「応己断己断」(according to your true self, get you the decision.) というのがある。上掲 Yeats の伝記の中の言葉を禅門のいう「本来自性」やフッセルのいう「先験的還元」などと考え合せてみると興味津々たるものが有る。

Ⅲ 上掲Ⅱの作図は $OX = OX'$ としての作図であるが、大抵の場合、後には $OX \neq OX'$ となるのであるから次に示す二つの場合が考えられる。

(1) $OX > OX'$ の場合

これは the ideal line of action for life $>$ the topological line of action for life の場合であるから the actual line of action は「左巻き」になって、それだけ人間の文化は進歩する。J. P. Sartre のいう coefficient

utensilité (有用率) の場合がそれである。

(2) $OX < OX'$ の場合

これは the force of the ideal line of action $<$ the force of the topological line of action の場合であるから the actual line of action は「右巻き」となって、それだけ人間の文化は後退する。国を挙げて無意味な戦争に突入する場合などが典型的な後退のケースで、このような場合に君死ニタマフコトナカレ(晶子)とか人間ノ条件(五味)とかいう文学が発生する。仏教でいうコンマ(羯摩) = karma (業) に依る輪廻 (samsāra) とは概ね「右巻き」の連続の場合を意味するもの様である。これが Sartre のいう co-efficient adversité (逆行率) の場合である。

13 しかしながらミギマキ (right turn) とヒダリマキ (left turn) とは、「大方広華嚴經」その他Buにも明らかに示されてある通り、柱時計の振子のように右へ左に転向を続けるものであるけれど人類文化史の大勢は次第に左巻きに偏向しつつある。
^{すぎとし} 逾越 (passover) のお祭のチャンスは人間の歴史において次第に多くなる。
かくしてアイデアと場所の論理との対立に依る両面価値性に基く生活行動の振り子の振幅が小さくなるに連れて我等の価値判断はその golden mean に近付くのである。

14 さてさて芭蕉と R. L. S. の作品について、それが如何に強力に作者の胎内復帰の空想とのツナガリを持って発想されているか? それが如何にアイデア的超絶主義の立場から発想されていたか? まず芭蕉の句の中から10句を拾ってお目にかけましょう。

(1) 古池や蛙飛び込む水の音

Got a jump a frog

Into the timeworn pond,

Into the stillness profonde.

└ × └ × └

└ × × └ × └

└ × × └ × × └

脚注: アイデアの世界の幽玄に目覚めた魂は場所の論理一辺倒の愚かにきに気付くで

トボロジツク

あろう。そこで right turn して<一超直入菩提地>の姿勢に移る。発菩提心とはこのことである。

- (2) 四方より花吹き入れて鳩の海

All, all are blown

Being o'er the mere flown ——

The leaves o' cherry flowers.

× ㄥ × ㄥ

× ㄥ × ㄥ (×) ㄥ

× ㄥ × ㄥ × ㄥ

脚注：古池や……の句と共にアイデアを求めての「一超直入如来地」の心境を作者は womb phantasy をとおして、何と端的にわれらに示していることよ。

- (3) 荒海や佐渡によこたふ天の河

O'er the perilous seas that roar

There streams the galaxy hoar

Toward the isle of Sado.

×× ㄥ ×× ㄥ × ㄥ

× ㄥ × ㄥ ×× ㄥ

× ㄥ × ㄥ ×× ㄥ

脚注：病苦も貧窮も恐怖も超克してアイデアの世界に参入しようとし、終にこれに成功した作者の荘嚴極まりない心頭風景のスケッチである。棟方志功の力作を見ているようだ。作者は荒海と荒天と暗黒の上に流れている天の河の荘嚴を見て心のふる里であるアイデアの vision の前に絶対帰依の心を起したのである。

- (4) 名月や池をめぐりて夜もすがら

Round and round the pond,

Did I walk all night,

With a harvest moon so bright.

ㄥ × ㄥ × ㄥ
 ㄥ × ㄥ × ㄥ
 ㄥ × ㄥ × ㄥ × ㄥ

脚注：仲秋名月の夜 その円かな 月影を宿す池のまわりを 行く程に歩む程に真如の
イデア
イメージ
 月影を求めて現世を超絶しようとする心を作者は何時までもとどめる事が
 できなかったのである。

- (5) 此秋は何で年よる雲に鳥

Standing at gaze
 Into the cloud
 Dotted with fowl
 How I feel, O Death,
 Thy approach !

ㄥ × × ㄥ
 ㄥ × × ㄥ
 ㄥ × × ㄥ
 ㄥ × ㄥ × ㄥ
 ㄥ × ㄥ

脚注：今年もまた雁渡しの風が吹いて白い翳雲の表てにかりがねの列が小さく点々
かり
 と見える。天地の悠久に比してなんぞ人生の倏忽たる！これを思えばイデア
 の世界（胎蔵界）の幽玄に参入せんとする心一入切なるものがあるとの意。
 おそらく「君を思えば人をして老いしむ。歲月忽ち己でに暮れぬ」（文選）
 のエコーであろう。

- (6) 秋深き隣は何をする人ぞ

What are you,
 Next-door man ?
 Did I wonder quite,
 One late autumn's night !

ㄥ × ㄥ

ㄥ × ㄥ

ㄥ × ㄥ × ㄥ

ㄥ × ㄥ × ㄥ

脚注：自己と他者との差別を超越して、天地一枚の命の中に溶け込もうとする作者の姿勢を示すもの。そこに自己と他者との共感のうれしさがある。

- (7) 馬ぼくぼく我れを絵に見る枯野かな

How did my pony wend

Through the winter's waste,

Me on the back in haste !

ㄥ × ㄥ × ㄥ

ㄥ × ㄥ × ㄥ

ㄥ × ㄥ × ㄥ

脚注：超絶主義の諦観によって自己と他者との区別が蒸発すれば、womb phantasy がしきりに現れ、ノロノロと道草を食べながら、冬の野を行くわが馬も自分も一続きの命となるから立腹するべき対象が無くなったのであり、そこに多分のユーモアがある。

- (8) 面白し雪にやならん冬の雨

Good ! it will soon

Be snowing fair ——

The winter's rain at noon.

(×) ㄥ × × ㄥ

× ㄥ × ㄥ

× ㄥ × ㄥ

脚注：^{だせい}打成^{べん}一片して^{アイデ}実相に目覚めた解脱者の眼に映ずる自然の美しさを作者はwomb phantasy として^{うた}詠い上げているのである。息を呑むほどの美しさだ。アイデアの世界の寂光である。

- (9) ^{やが}頓て死ぬけしきは見えず蟬の声

They will soon be dead ——

Those cigalas on music there;

Yet they look it ne'er!

└ × └ × └

└ × └ ×× └ × └

└ × └ × └

脚注：やがて死ぬべき自分の運命の運命に超然として現身の命をたのしむ夏うつそみの蟬のニルバナ（ねはん）を得たる者の如き生活の姿勢に作者は敬服しているのである。

⑩ 閑かさや岩にしみ入る蟬の声

Into the rocks, they get,

Of the temple yard ——

Songs of cigalas in stillness set.

└ × └ × └

└ × └ × └

└ ×× └ ×× └ × └

脚注：観衆の中にしみ込んでいるアイデアの vision 禅門でいうほくらくみた撲落位他とはこのことか。

⑮ R. L. S. の詩集 'A Child's Garden of Verses' (1881—1885) の中から三点を択んでその邦語訳とともに次に掲げます。これらの詩を書いた頃の作者の健康は極度にわるく、咯血はする、坐骨神経痛で腰は起たず、また咯血をさせないようにと右腕を脇ッ腹にきびり付けられていたから、仰臥のまま、結膜炎で眼脂のでる眼を辛ッと開けて、而も半暗室化された病室にねていて、眼の上につるされた白紙を張った書板に向って辛うじてこれらの詩を書きつけた。しかも一旦書きだすと非常なスピードでそれを書き上げたというから、全く驚くのほかはない。元禄2年旧暦7月6日に今町又は今津又は今来（＝直江津）に疝氣といば痔持ちの病軀を引きずる様にして辿り着いて、文月ヤ……の句と荒海ヤ……の句を芭蕉は制作した。〔然るにこの句を7月7日に雲崎で作ったように作者が奥ノ細道に書いているのは、星祭りの前夜

に今津で聞いた出雲崎の地名に関する神話乃至民間伝説を踏まえての作者の作爲的な日付け並びに所書き変更だと私は睨らんでいる。詳細の説明は他日にゆずる。]この時の芭蕉の困憊もさる事ながら、R. L. S. が「子ドモノ歌園」を書いた頃のそれには比すべくも無さそうである。しかし何れにせよ、それらの努力が topologic=場所又は即時の論理一辺倒のナンセンスに対するイデア的な=対自的な抵抗であることに変わりはない。かくして人間の条件は次第に改善されていくのである。

(1)

LOOKING GLASS RIVER

Smooth it slides upon its travel

Here a wimple, there a gleam

O the clean gravel

O the smooth stream!

鏡になって流れる

鏡になって流れる河

ここではざわざわ小波、あすこではうね翫って光る

何んときれいな小砂利ねッ!

何んと滑かに流れる河ねッ!

Sailing blossoms, silver fishes,

Paven pools as clear as air ——

How a child wishes

To live down there!

散って流れていく花、ぴかりッと光る魚

底石のみんな透かして見える淵

子どもなら誰でもが

あの河底に行きたいだろう!

We can see our coloured faces

Floating on the shaken pool

Down in cool places,

Dim and very cool;

僕らの顔が水の鏡に映って見える

ゆらゆらと顔の色さえよく見える

水底へ沈んで映つる

ぼんやりとボヤけて映つる

(以下略)

(2)

THE SWING

How do you like to go up in a swing,

Up in the air so blue ?

Oh, how I do think it a pleasant thing

Ever a child can do !

ぶらんこ

ぶらんこに乗って天まで上る

あの気持, どんなもんだい?

あんな愉快な事が又とあろうか?

あんな遊びが又とあろうか!

Up in the air and over the wall,

Till I can see so wide,

Rivers and trees and cattles all

Over the countryside—

風の中に上っていく, 壁を越えていく,

いくと眼の下がひらけて来る,

河が, 樹が, 牛が, 皆見えて来る

この ^{あたり} 辺の物が, 皆見えて来る。

Till I look down on the garden green,

Down on the roof so brown—

Up in the air I go flying again,

Up in the air and down !

縁のお庭が眼の下に見えてくる,

赤茶けたお家の屋根が見えてくる——
まだまだ飛んで上^{のぼ}っていく、
風の中を上って上って又下がる！

(3)

WINDY NIGHTS

Whenever the moon and stars are set,
Whenever the wind is high,
All night long in the dark and wet,
A man goes riding by.
Late in the night when the fires are out,
Why does he gallop and gallop about?

風の吹く夜は
月が沈んで星が消えるといつでも
ヒウヒウと風の吹く夜はいつでも
雨のやみ夜を夜明けまで
男がひとり馬にのって突ッ走る
夜がふけて灯^みがきえて暗くなると
何故あの人^は馬にのって突ッ走るのか？
Whenever the trees are crying aloud,
And ships are tossed at sea,
By, on the highway, low and loud,
By at the gallop goes he.
By at the gallop he goes and then
By he comes back at the gallop again.
樹がゴウゴウと唸る時いつでも
船があらしに揺れる時いつでも
ポカッポカッと馬を大路に走らせる
ポカリポカリと突ッ走る
吹く風に聞えずなる迄突ッ走る
それからグルリ向を換え又ポカポカと駆戻る

脚注：上掲「鏡にない流れる」は胎内生活第21期＝安養期にぞくする womb phantasy に基く作品，「ぶらんこ」は第2期安養運動期にぞくする womb phantasy に，「風の吹く夜は」第3期＝自由運動の womb phantasy に基く作品である。

- ⑩ 場所の論理^{メー・オン}＝非実在の原理にのみ偏向しようとする近代人の生き方への resistance の方法として芭蕉や R. L. S. がどれ程 womb-phantasy (胎内復帰の空想) に基く現状超越的なイデア的な生き方に志向したか，どれ程の mother complex^{ee} (母親定着者) であったかは

ふる里や臍の緒に泣く年の暮

O how I cried

one ydar-end day

O'er navel string o' mine

At my native place!

という句を見ても略想像はつく。R. L. S. の場合は，芭蕉よりも，もっとはっきりしている。

TO MY MOTHER

You too, my mother, read my rhywes

For love of unforgotten times,

And you may chance to hear once more

The little feet along the floor

母さんへ

母さん貴方もこれ此唄をお読み下さい

昔のことがお懐かしいでしょう

読めば在りし昔を思い出しましょう

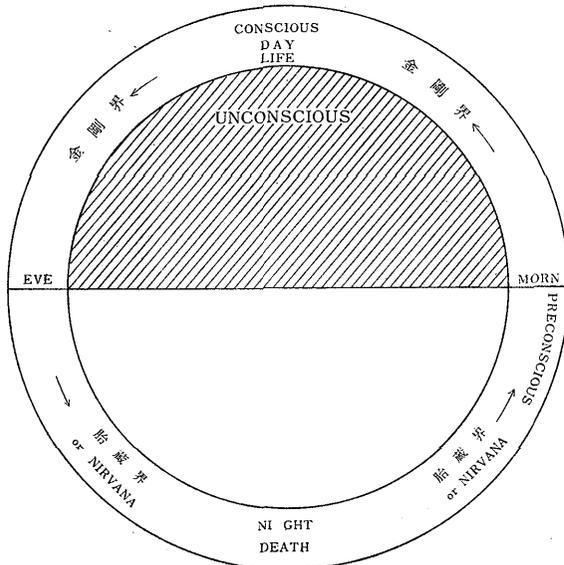
バタバタと歩いた小っちゃな足音を

という可愛い唄が「子ドモノ歌園」に収めてある。彼は一頃父親とははげしい口論をした。父さんへと云う唄は一つも無い。上掲 R. L. S. の唄の中で，(1)は彼が胎内生活前期(安養期)に経験した生活感情へのエコーであり，(2)は彼が胎内生活中期(安養・運動期)に持った生活感情へのエコーであろう。そして(3)は彼がかれの胎内生活

後期（運動期）の生活感情へのエコーであろう。そしてこれらの生活感情は詩人の前意識の中にアイデアのイメージとして心のふる里として保存されてあったのであろう。同じことは上掲芭蕉の句のそれぞれについても真理である。

①7 われらがその生活の理想とするアイデアのイメージはわれらの前方には無く後方＝思い出の中にある。だからこのイメージを求めるものは、先ず内省して自分の無意識 (the unconscious) の中にロゴスによるアイデアのエコーを聴くべきである。われらの神話や民話はこのエコーをオトヒコ、乙彦, junior echo と名づけており、これに対してわれらの前意識 (preconscious) の中に聞えるロゴスによるアイデアのエコーをエヒコ、兄彦、英彦, senior echo と名づけて二つのエコーを区別している。けれどオトヒコはエヒコの声のぼんやりした反復に過ぎない。そこで極めて鮮明にロゴスの声を聞きたいと思う者はまず前意識にまで hark back して絶対の無 (*néant absolu, absolute nil = 〇 = 空*) を直観しなくてはならない。これらの観を透過しえた時、われらは甦めてわれらの前方にアイデアが全面的にそのイメージを顕わすのを見るであろう。下の図をごらん下さい。

脚注：エヒコ、オトヒコについては本学紀要の本号所載の宮野講師の論文をご参照下さい。



この *ideo-topological circle* (因縁輪廻) については多くの神話や民話が語られてある。しかしそれらは何れも大同小異である。*Hesperides* という西方極楽園にみわたった金のリンゴ(日神のシンボル)をドラゴンが口にふくんで夜の食す国を渡って常夜の長鳴き鶏 (*East coker*) の鳴く処まで運んでいくと云うのが、このサークルの *NIRVANA* の部分をカバーする神話や民話の極めて普通な形である。文学としてはダンテの神曲が最もポエチックなこの部分への解説であろう。漢字の龍は字音的には *drakwn* → *trakwn* → *rawn* というギリシャ語形からの転訛が考えられるし、象形的には立部は *golden apple* をふくんだ竜の顔の正面を示し、月部は日神 (*Apollo*) と月神 (*Hera*) とのダブル・イメージでトラゴンは昼は *Hera* を夜は *Apollo* を口にふくんで虚空を済すものと考えられたからである。尾部は竜の胴体と尾部の象形。日本語のタツは *drakwn* → *trathw* → *tatw* への転訛が考えられる。*-r-* の発音が現代英語のそれに似ていたとすれば *tra* → *tha* → *ta* への転訛は益々有りそうな転訛である。

㊦ 芭蕉がその「旅行吟集録帖」又は「オクノシホリ」に何うして「奥の細道」という名を最後に付けたのか? については志田先生の委曲を尽した論文のあることは世間周知の如くであるが、私は私の立場から一言これに言及したい。*R. L. S.* と同じように遅い '*womb-phantasy*' (胎内復帰の空想) の所有者であった芭蕉のような人間の場合は、その考えること為すこと一々について彼が *hark back to the womb through the navel trail* しているのだと云う事実をわれらは確認すべきである。随って奥の細道が俳聖の無意識において '*THE NAVEL TRAIL UP NORTH*' を意味していたかも知れないと思う。同様のことは *R. L. S.* の場合にも有った。彼はかれの児童詩集 '*A Child's Garden of Verses*' に現在の書名を付けることに落ちつくまでに '*Penny Whistles*' としようか? '*Rimes for children*' としようか? と前後四年間も悩んでいる。が、とうとう現在の現在の書名に落ちついた。それは何故であろうか? これも上述の芭蕉の場合と同じく、*R. L. S.* が遅い胎内復帰の空想者であったから、'*Penny Whistles*' や '*Rimes for Children*' というが如きかれの胎内復帰の空想と無縁の書名に落ちつくことは到底忍びがたい事であったのだと私は考える。結局 '*A CHILD'S GARDEN OF VERSES*' という詩集名がいちばん彼の心の故郷へのあこがれを刺発する名前であったのだらうと私は思う。

④ 芭蕉と R. L. S. と —— この二人の詩人ほど到る処の土俗学的研究すなわち筆者のいう 'ideo-topological history of the area' (地域社会の因縁相関史) に強い興味をもち、且つこれが研究から大きな生き甲斐を覚えた人は、少くともかれらの生きた時代においては異数の事例に属するものだと私は思う。R. L. S. の場合、一例を挙げると、彼は、自分の健康が勝れず凡そ骨の折れる制作に着手するには余りにもスタミナが無きすぎると感じた時、自分の暮している処々の土俗学的研究に興味を寄せこれを ballad 化或は story 化することによって少なからざる生き甲斐を開発したものである。彼が1890年にだした 'Ballads' (民謡詩集) の核心となっている 'Ticonderoga' というバラッドがある。これは彼が翌1891年の秋熱中して書いた 'The Master of Ballantrae' の最後の場と大きに関係のある詩である。作者は地方の土俗学的研究からその題材を拾ったのである。堂々たるバラッドであるが、1887年暮におけるその発行部数が僅かに五十部というに至っては、それが自分の生活を意味づけるためにのみこの大作を彼が完成したのだという事は明白である。また芭蕉の場合について、その一例を挙げると、かれは元禄二年旧暦七月六日に「文月ヤ六日モ常ノ夜ニハ似ズ」という句を作っている。この句は志田先生のご研究によると『梨一の菅菰抄に「此真蹟、今猶越後今町(直江津の古称) 聴信寺にあり、詞書等附録にしろす』とあって附録(酒竹文庫蔵)の方を見ると、芭蕉真蹟の詞書(前書)が、「たなばた近きゆふべ越の今町とゆふ所に草枕す。此ところの人々尋とはれて、風雅の事共なんど語り慰みて」とあるので、これによってこの句が七月六日直江津で制作されたことが判明する。「風雅の事共」とは何の事か? 現今の語に換えると、この地方の民間信仰の話であり、ideo-topological history of the area (地域社会の因縁相関史) である。本稿④に述べたとおり芭蕉は疲労困憊の極に達して七夕の前夜に直江津に到着した筈である。にも拘わらず彼は土地の好事家たちを引見して佐渡の瀬戸等に関する神話民話の数々を聴き取りこれを自己の文学に換えて、例えば「荒海や佐渡ニヨコタフ天ノ河」の句を作って病苦の中にも少なからぬ生き甲斐即ち生きることの意味の開発に努めている。真に見上げた生活態度ではないだろうか。処が銀河の句の上五=アラウミヤが持つ民俗学的な意味について、又「文月ヤ六日モ常ノ夜ニハ似ズ」の句が含む土俗学的な意味について、又今町、今津、今来、出雲崎などの地名が土俗学的な信仰とどのような関係をもつかに就いて、これまで何等見るべき研究が行われていない事はまことに遺憾なことであると筆者は考えている。〔微力ながら此等について筆者が行った研究の発表は他日にゆずることとする。〕